Ⅰ　学校の概要

小学校外国語教育推進モデル校事業　　高松市立浅野小学校

◆児童生徒数及び教員数

〇児童数

第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年	特別支援	全　校
２学級 ４７名	２学級 ５２名	２学級 ５８名	２学級 ５２名	２学級 ６７名	２学級 ５９名	４学級 １５名	１６学級 ３５０名

〇教員数　　２５名

◆学校の特色

本校は、令和５年度香小研外国語部会研究会に向けて英語学習の充実と英語教育推進のための環境整備を進めている。外国との触れ合いを意識した教科横断的内容の学習の設定も考えている。児童はアメリカから来校しているALTの先生との関りを楽しみにしており、外国語への興味関心が高いといえる。校内放送でも英語を使ったアナウンスや音楽を流すなど、校内の英語環境を少しずつ整備し、日々英語を耳にしながら過ごしている。また、少し足を延ばせば高松空港があり、ひょうげ祭りという地域の伝統的な行事を核として、学んだことを外国の方へと発信するチャンスもある。さらに、保護者の外国語教育への関心も高く、楽しく英語を学んで将来に生かしてほしいと考えている。児童・保護者・地域が一体となり、外国語教育に取り組むことができる好環境にあることが本校の強みであるといえる。

Ⅱ　研究主題等

研究主題

「互いに思いや考えを伝え合うことを楽しむ外国語授業」
～自己有用感が高まる言語活動をめざして～

◆研究主題設定の理由

本校の特色である、「地域・保護者とともに歩む浅野」の力を生かすため、外国の人を中心とした他者へ発信し、コミュニケーションを図るという児童と他者との双方向の取り組みを積極的に行うことで、対話の深化をめざしたいと考えた。地域ブランド「ひょうげ祭り」を生かし、郷土を知り、愛することから国際理解へつなげ、自分の国・郷土に誇りを持ち、世界で活躍できる浅野っ子の育成をめざしていく。また、本校の課題として、児童の自己肯定感をより高めていく必要がある。外国語の授業の中においても、生徒指導の３機能を取り入れ、全教員の共通理解のもと、自己肯定感を高める授業の成立を研究していく。さらに、この研究に取り組むことで、教職員の外国語教育に対する意欲・自信を高め、より同僚性の高い学校をめざしていきたいと考えている。

◆研究内容及び方法

仮説①　必然性のある言語活動を通して、双方向のコミュニケーションにチャレンジする児童になる。
仮説②　外国語を通して他者とかかわることで、郷土の文化を再認識する児童になる。
仮説③　ICTを有効活用することで、人とのかかわりをエンジョイできる児童になる。

Ⅲ　研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

1　（10 の指標）　英語の勉強は好きですか。

指標　「①当てはまる＋②どちらかと言えば当てはまる」の合計

5 月調査 79.2% → 目標値 85% → 11 月調査 81.4%

指標の達成に向けた実践

【６年　Let's talk about Japanese food culture!　の実践から】

（１）「本物」との出会いのしかけ

伝える相手が「本物」であれば、児童の言語活動への意欲は高まる。そこで、台湾の友達という相手を設定することで、「使う言語が違うから、コミュニケーションをとるにはお互いが勉強している英語を使おう」という意識をもつことができ、英語を話す必然性が高まった。**（資料①）**

〈１回目の交流で得た課題〉
もっと台湾の友だちから反応が返ってくるように工夫したい！

○本単元のねらい
聞き手を意識した発表
・聞き手の反応を確かめる
・聞き手が参加し楽しめる

資料①
児童の意識の流れ

（２）児童が考えをよりよく改善するための支援

担任と ALT が２パターンのデモンストレーションを示し、伝わりやすい発表にするためにはどのような点を工夫すればよいかを考えられるようにした。

ワークシートには、４線が入った短冊を用いることで、順番を入れ替えることが容易になり、追加表現や質問などを付け加えながら発表内容を改善することができた。**（資料②）**

資料②　４線の短冊を活用する児童

グループ活動で、より具体的に伝えるためのポイントを話し合ったり、知らない表現を知っている単語を組み合わせて表現できないか考えたりする姿が見られた。その際、質問を受けた ALT は、すぐに表現を伝えるのではなく、ヒントにつながるような既習事項を示して、児童の思考が深まるように心がけた。**（資料③）**

資料③　ALT の支援の様子

台湾との交流は、相手校の新学年スタートに合わせた９月から、オンラインで継続して３回行った。本物の相手との交流が、回を追うごとに児童の関心と自信の向上につながった。

2　（10 の指標）　授業の中で、目標（めあて・ねらい）が示されていると思いますか。

指標　「①思う＋②どちらかと言えば思う」の合計

5 月調査	→	目標値	→	11 月調査
92.0%		92%		95.3%

指標の達成に向けた実践

【５年　What would you like?　の実践から】

（１）題材の工夫

資料④
タブレットを活用しての交流

NEW HORIZON の Unit６、“What would you like?” の学習では、地域の伝統行事「ひょうげ祭り」でふるまわれている「ひょうげうどん」を題材に、自分のおすすめのメニューを考え、お店と客のやり取りを使って伝え合う活動に取り組んだ。おすすめするという視点をもつことで、対話が活性化して、それまでのスキルアップをねらったペア活動から、思考をともなうグループ活動へと進化していった。

【２年　数えて遊ぼう　“Let’s play the CANDY LAND.”　の実践から】

（２）意図ある活動のしかけ

資料⑤　２年団が作成した教材

	Play rock,paper, Scissors. じゃんけんを 1回	Hello. How are you? Thank you,bye. あいさつ	Hello. Do you like (　)? Thank you,bye. 色の しつもん	Hello. Do you like (　)? Thank you,bye. 食べものの しつもん	Hello. My name is (　). Nice to meet you. じこしょうかい
グループ	① みんなで	② 奥濱先生に	③ 森田先生に	④ 別所先生に	⑤ キアン先生に
となりの友だちと	⑥ 教頭先生と	⑦ 荒岡先生に	⑧ 松原ゆき先生に	⑨ 岡先生に	⑩ キアン先生に
前の友だちと	⑪ 近藤先生と	⑫ 香西先生に	⑬ 荒岡先生に	⑭ 教頭先生に	⑮ キアン先生に
ひとり	⑯ 岡先生と	⑰ 森田先生に	⑱ 別所先生に	⑲ 奥濱先生に	⑳ キアン先生に

他学年でも、児童が単元を通して取り組む活動のめあてと、その目的意識を明確にして学習に臨めるように、教師の支援の在り方を模索した。

２年生では、ALT と学年団が連携して教材開発を行い、数を数えるという活動を常に意識できることをねらった。「CANDY LAND」の中にあるミッションを達成するために、２つの多面体サイコロを振り、出た数をたして、「間違えずにコマを進めるためにみんなで声に出して数える」という、必然性のある活動を設定することで、児童が楽しみながら何度となく数を数え、英語での数の数え方に自然に親しむことができた。**（資料⑤）**

児童が「〇〇のために活動に取り組む」という意識を大切にすることは、活動の目的・場面・状況を明確にすることにつながり、どの学年でも児童の意欲が高まる結果につながったと考える。

３　（10 の指標）　大型提示装置（プロジェクター、電子黒板等）の ICT 機器を活用した授業を行っていますか。

指標　「①よく行っている＋②どちらかと言えば行っている」の合計

5 月調査	→	目標値	→	11 月調査
83.3%		70%		90.9%

指標の達成に向けた実践

【１年　Colors の実践から】

（１）意欲を高める視覚支援

資料⑥　タッチで色を変えられるしかけに

単元の終末に、クラスの虹を作る活動を行った。交流で分かれた色ごとのグループで、一緒に画面をタッチすると、そのグループの色が反映されるように設定しており、みんなでクラスの虹を完成させることができた。

活動の内容と連動させた視覚支援により、児童は英語を活用してオリジナルの虹を作ることができた達成感を感じていた。**（資料⑥）**

【６年　Let's talk about Japanese food culture!　の実践から】

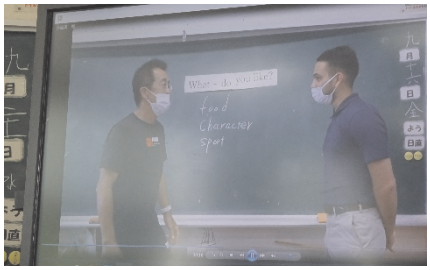
（２）オンラインで海外とつながる

交流の前に、学級担任がオンラインで台湾とつないで、ALT 同席のもと打ち合わせを行ったり、コミュニケーションアプリや通訳アプリを活用して文面でやりとりを行ったりした。交流の際には、電子黒板を複数台活用し、台湾の児童の反応を見ながら進めた。本校の様子を映す共有画面では、児童が作成したプレゼンテーションを紹介し、やりとりができるよう工夫した。**（資料⑦）**

資料⑦　台湾との交流時の電子黒板画面

【３年　What do you like?　の実践から】

（３）ALT 不在時の活用例



資料⑧　動画でのデモンストレーション

日常の教育活動では、ALT が参加していない、担任のみでの授業実践となる場合も想定される。そこで、３年では同想定での研究授業を行った。授業に備えて、事前に ALT と打ち合わせをしておき、デモンストレーションの様子を動画で撮影して、授業の中で活用した。限られた人材や時間の中で、より効果的な支援をするための工夫を考えるきっかけとなった。**（資料⑧）**

教科の特色を鑑み、学年に応じて、効果的に ICT 機器を取り入れることで、授業のあり方に幅が広がり、担任以外の人材を活用することにもつながったと考える。

4　（10 の指標）　お子様は外国語の授業や活動について、ご家庭で話をすることがありますか。

指標　「①よく話す＋②ときどき話す」の合計

5 月調査	→	目標値	→	11 月調査
37.0%		50%		41.7%

指標の達成に向けた実践

【３部会の実践から】

本校では、研究を進めるに当たり、３つの部会を構成し、学年団を考慮しながら教員それぞれに担当部会を設定している（全体計画部会、授業計画部会、環境掲示部会）。部会ごとに役割を分担しながら、外国語教育実践のための基盤づくりに取り組んできた。

（１）日常から外国語に親しめる環境づくり

資料⑨　授業計画部会の取組例

授業計画部会では、まず初めに、学年を通して授業の展開をパターン化し、「浅野スタンダード」として、全学年共通のあいさつや掲示物を検討、作成した。その後、日常から外国語に慣れ親しむ工夫として、さまざまな取り組みを計画・実践した。

AET（Asano English Time）では、火曜と木曜の朝の活動の時間に、児童がさまざまな言葉に慣れ親しめるよう、内容を計画して、チャンツや歌に取り組んでいる。

Hello World は、年に３回、教員の体験から諸外国の生活や文化を紹介する取り組みである。Teams で配信し、全校で視聴した。子どもたちは、初めて見る諸外国の景色や食べ物に、歓声をあげながら楽しんでいた。各委員会では、放送を担当する浅野っ子情報局、給食委員会が、日常的に放送の中で英語を使ったり、ALT からの食材クイズを出題したりしている。その際、原稿を読む練習には ALT も参加し、正しい発音を意識するように心がけた。**（資料⑨）**

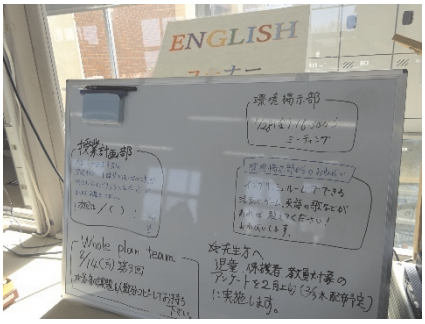
環境掲示部会は、学校全体に、外国語に慣れ親しめるような環境を整えるため、どんな工夫が必要かを具体的に考え、形にした。

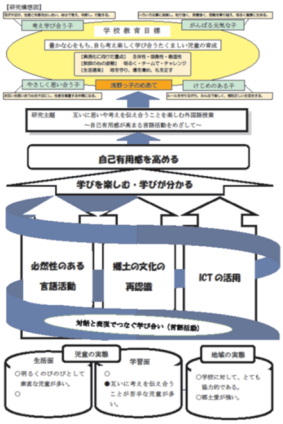
主に低・中学年が利用する English　Room には、新たに各教室と同様の電子黒板を整備し、教室全体に英語に没頭できるような掲示を作成した。その際、学校のマスコットキャラクターも活用して、児童が親しみやすい掲示を心がけた。校舎全体に、英語表記の教室表示や英単語の掲示、また ALT や Hello　World と関連させた掲示コーナーを作成するなど、日頃から児童の目にふれる場所で英語に親しめる環境になるように努めた。

児童が作成した教室表示の横には、QR コードが掲示してある。これをタブレットで読み込むと、その部屋について ALT が英語で説明する動画を見ることが可能で、学校探検やクラブ活動、英語の授業など、さまざまな場面で活用できるようにした。**（資料⑩）**

資料⑩　環境掲示部会の取組例

これらの環境づくりを学校全体で取り組むとともに、全体計画部会では児童や保護者の実態把握のため、アンケートを作成し、R３年度末から３回にわたって調査を継続した。合わせて同部会で、現教主任や教務主任を中心とした研究の全体構想の話し合い、外国語と各教科との横断をふまえた各学年の年間計画の見直し、また、それらのスケジュール検討など、研究全体に関わる計画、調整を進めていった。**（資料⑪）**





資料⑪　全体計画部会の取組例

【 Keyon's ちょいスクールの実践から】

（２）教員研修の充実を目指して

教員研修の場として、月に２回程度、放課後を活用してALTとのショートレッスンの場、「Keyon's　ちょいスクール」を継続して行っている。毎回テーマとキーフレーズを設定し、教師もSmall　Talkを体験することで、児童の困り感や必要な工夫を具体的にイメージし、授業の改善につながっている。時には、中学校にも勤める ALT が、中学校での取り組みの様子を話してくれ、中学校との接続を考える場ともなった。　**（資料⑫）**

資料⑫　Keyon's　ちょいスクールの様子

【年間を通して】

（３）多様な人材の活用

資料⑬　児童が生き生きと交流に臨む姿

その他、今年度は、さまざまなチャンスを生かして、外国の方々と直接ふれ合える機会を積極的に模索し、教育活動の中に取り入れていった。春の校外学習では、全校児童がアイパル香川を訪問し、国際交流員の方々からお話をうかがった。この時の出会いを生かして、１１月と１月に、国際交流員訪問事業を活用し、年間を通じて児童の意識の中に身近な外国人の存在として位置づけ、外国語教育や総合的な学習の時間につなげることができた。台湾との交流も、新たなチャレンジであったが、今年度の交流を通して、今後の取り組みのさらなる可能性を見出せたと感じている。

さらには、内閣府国際社会青年育成事業の地方プログラムにおける国際交流団学校訪問にて、エストニア共和国とドイツ連邦共和国の青年たちと、心からの交流を体験することを通して、児童の自己有用感の高まりが実感としてとらえられた。　**（資料⑬）**

教師も児童も、年間を通して日常的に外国語に親しめる環境づくりに徹したことで、意欲的な取り組みにつながり、家庭での姿も変化してきたのではないかと考える。

Ⅳ　研究の成果と課題

【成果】

○　学校全体で取り組んできた常時活動（AET、Hello　World、委員会活動など）によって、児童の外国語に対する不安感を払拭し、関心・意欲を高めることにつながった。

○　授業中の取り組みが児童の目的意識を明確にしたものであれば、自ずと児童の関心・意欲は高まる。単元のスタートとゴールを明確にし、教師と児童が共有して一緒に目指していくことで、児童が本当の意味で楽しみながら外国語の学習に取り組むことができたのではないか。

○　各学年で教師やALT、JTEのデモンストレーションを積極的に取り入れ、児童のモデルとしてわかりやすいかどうかを探求したことで、児童がより自信をもってコミュニケーションに取り組めるようになった。

○　教師の授業づくりの意識が、これまでの「活動の充実」から、「内容の充実」に変わってきた。単に楽しい授業を目指すのではなく、児童がコミュニケーションについて自分自身で考え、工夫し、実践するためには、どのような単元構成やしかけづくりが必要なのかを、学年団で検討しながら教材研究・開発に努めることで、授業の質と児童の意識にも大きな変化が見られた。そのことは、児童の思いが、単純な「楽しい」から、本当の意味でのコミュニケーションのあり方の追求へと変容することにもつながっている。

○　ICT を効果的に活用する場面が増えた。単なる音声や映像ツールとしてだけでなく、国際的な交流をしかけたり、学級経営の一端を担う活動へとつなげたり、また、児童同士のコミュニケーションツールとして活用するなど、活動の幅を広げる教具としての活用を探究することができた。コロナ禍が広がる中で、オンライン交流は台湾の学校からのニーズが多い現状がある。このチャンスを生かすべきと考える。本校では、研究授業の際ご指導をいただいた神戸市外国語大学の横田玲子先生よりご紹介をいただいた。

【課題】

●　個々の活躍や頑張りをしっかり見取るために、評価のあり方を見直し、目的に合った場面で適切に評価をすることが必要である。

●　児童が困ったとき、ALTやJTEに表現を尋ねて解決するのではなく、児童自らが、もっている知識を活用しながら、表現を工夫して伝えようとする姿勢を育てていくことが大切である。

　→既習事項を活用することを意識させ、自ら考え工夫して相手に伝えようとする姿勢を育てる支援の研究を深める。

●　児童が既習を活用する姿勢を高めるためにも、Can-Doリストの作成が必要である。Can-Doリストを効果的に活用することで、児童は自分の到達度を把握し、さらに様々な表現へのチャレンジにつながると考える。そのため、児童の知識を高められる支援として、リストの整備を図りたい。

●　台湾との交流は、新年度のスタート時期が異なるという点から、難しさもある。事前に相手校の教員と互いの意思疎通を密に行い、交流の進め方について十分すり合わせる必要がある。

●　今年度の研究では、仮説②に挙げた郷土の文化の再認識について、どの学年で関連をもたせるべきかについて議論をした。学年の系統性や、他教科との関連を考えると、学年を絞っての取り組みの方が効果的であることがわかったので、今後、具体的に検討していきたい。

●　保護者への情報発信の手立てとして、授業で活用しているファイルを定期的に持ち帰らせて保護者のサインをもらうようにしたり、団だよりなどでの定期的なお知らせ、児童が学んだことを保護者に伝えてみる宿題を実践したりするなど、工夫が必要である。